令和５年度　　大町市立美麻小中学校　　**魅力ある学校づくり評価シート**　（A：十分である　B：概ね十分である　C：やや不十分である　D：改善を要する）

学校教育目標	教育課題	自己評価・総合評価			学校関係者評価・まとめ
	協働の学びと個別最適な学びの質を高める	校長先生が別紙で評価します			学校運営協議会長が別紙でまとめます
		成果と課題	評価	改善策・向上策	学校関係者評価の結果及び意見
心と体をひらいて学ぶ美麻の子	重点1　学びづくり 協働の学びのなかで、自分の学びが自覚できるような振り返りをくりかえし、次の意欲につながる授業づくりを目指します。	・児童生徒の意識・学習問題・振り返りが合致すると、児童生徒が追究の見通しをもち、対話や振り返りの内容が充実した。 ・教科によっては「願い」を位置づけることによって、願いを実現させるためには？という問いが生まれ、追究の原動力となった。 ・友の話に耳を傾け始めたが、わからないことを問うことに抵抗のある児童生徒が多くみられる。	B	・引き続き、児童生徒の思考過程を大切にし、学びがスタートできるように共通の願いや問いを学習問題に位置づけ、振り返りで学びをつなげていく。 ・対話を通して、思考を楽しむ授業づくりをしていく。その際、思考ツールを活用していくことで、友の見方・考え方を知ったり、メタ認知のきっかけになるようにしたりしていく。また「わからない」と言える気風を各学級で育む。	・自己評価の結果の内容の適切さについて ・自己評価の結果を踏まえた今後の改善策・向上策の適切さについて
	重点2　体づくり 元気アップ運動を継続し、持続可能な体力向上と健康生活の習慣化を目指します。	・「すこやかカード」による正しい生活習慣の意識付けが定着してきた。また食育面では、家庭科の授業で食事の役割や大切さを理解し、給食のメニュー作りから学ぶことができた。 ・元気アップ運動の目的を理解し、体を動かすことの必要性を意識できるようになってきた。体力をつけたい、気持ちをすっきりしたい、走りたい、筋トレがしたいなど、自ら考え、取り組めるようになってきた。	A	・年度当初に自分の運動面と健康面の課題を持つ機会を設定し、常に課題意識をもって取り組めるように課題を見える化する。また、その課題に対する振り返りの場を位置づける。 ・児童生徒が考える元気アップ運動の内容を充実させることや下校後や休日の過ごし方については、家庭とも連携を持ち運動習慣をつける。 ・規則正しい生活習慣の為の情報発信を家庭にしていく。	・自己評価の結果の内容の適切さについて ・自己評価の結果を踏まえた今後の改善策・向上策の適切さについて
	重点3　集団づくり 少人数の多様なグループを体験する中で、よりよいリーダー、フォロワーとしての自分の在り方について考えあいながら、深く信頼し合う人間関係に支えられた集団の構築を目指します。	・児童生徒同士の仲が良く、また、職員、多くの児童生徒が一人ひとりの個性を尊重しているので、多くの子が安心して学校生活を送ることができている。ジャンプ期の生徒がホップ期ステップ期の児童生徒の面倒をみたり、手本になったりしているので、特にステップ期の児童生徒がリーダーとして成長している。 ・集団づくりの上で大切にしている対話の場面では、パターン化や時間不足、また、発言の声が小さいなど、あまり学びが深まらない様子も見られる。	B	・今後も多様性を尊重する心を大切にしながら、児童生徒が主体となって企画・運営する活動を継続し、それを支援していく。 ・引き続き、対話の目的を明確にしたり、時間を確保したりすることで、対話を深められるようにしてく。また、リーダーの更なる育成と共にフォロワーとしての姿を見つめられる機会も作っていく。	・自己評価の結果の内容の適切さについて ・自己評価の結果を踏まえた今後の改善策・向上策の適切さについて

領域	対象	評価項目	評価の観点	一学期の振り返り	評価	改善策・向上策	二学期の振り返り	評価
教育活動	学びづくり	主体的に学ぶ授業	「３つの学び方」が大切にされ、児童生徒が主体的に学び、成就感がもてる授業が行われている。	聴くよりも話したい気持ちが強い。自分の言いたいことは言えるが、友の意見を受けてさらに考え合う姿がもっと見たい。聴くよさや必要感がわかっていないか。	B	・聴くことのよさ（他者の見方・考え方を知ることで自分の見方・考え方を見返すことができるなど）を職員で共有し、児童生徒に伝えるようにしていく。 ・魅力ある学習問題（身近なもの・複数の解があるもの・一人では解けないもの・判断が必要なもの）などを位置づけると共に追究への見通しを持てるようにしていく。 ・その時間の学びで、学習問題や今日のゴールに対して大切だと感じたこと、次時への問いを短時間で振り返えられるようにする。書き出せないでいる場合には、個別にやりとりし考えをもてるようにしていく。 ・問題がわかる子が説明をする時間を取り入れてみる。その説明がわからなかった子に対しては、説明を受けてわかった子が説明してみる場面をつくってみる。 ・課題把握、情報共有などの時間短縮をし、課題追究により時間をさけるように、もっと日常的にＩＣＴを活用していく。	多くの子が友だちの声に耳を傾けようとしている。一方で、わからないことを問うことは十分にはできていない様子がうかがえる。	B
			「魅力ある学習問題」から生まれた、自分のわからなさ（問い）を解決しようという目的をもって授業に向かうことができている。	自分なりの追究ができる子が多い。反面、追究が課題とずれていたり、友との対話で考えを更新できなかったりする姿も見られた。	B		児童生徒から出てきた問い（願い）、児童生徒の問いが沸き立つような学習問題を位置づけ、振り返りで学びをつなげることで、対話が活性化し、考えが更新されていく姿が認められた。	A
			「今日のゴール」「単元の核心」等をもとに、１時間や単元の終わりに、自分が大切だと感じたことを振り返ることができている。	ＯＰＰシートは有効である。文字の書けない子への対応が不十分であったり、時間が確保できない時もあったりした。	B		振り返りに、学習問題に対する自分の考えを記入することで、学習のメタ認知ができ、学習問題をより自分事として学びを進めることができた。	B
		考える力が高まる授業	個の学びが尊重され、対話を通して新たな見方・考え方に出合う授業が行われている。	自分の学び方を大切にしている。学力差のため、できる子が時間をもてあましてしまうこともあった。	B		答えではなく、結論づけた過程を伝え合うことで、友の意見を受け入れられる雰囲気が高まった。	A
			学習問題の解決のために ICT 機器や思考ツールなどを有効的に使って考えることができている。	必要に応じてＩＣＴを使っていた。手書きが苦手という子も取り組みやすい。児童生徒の自主的な活用については課題がある。	B		日常的に ICT を活用してはいたが、出た意見から全体の傾向をつかむために、Google Forms の集計機能を用いると、短時間の準備で、児童生徒の理解もスムーズにできそうだ。	B
	体づくり	健康づくりや体力づくりを意識した生活習慣	職員は、児童生徒が健康に気をつけて体力づくりを意識できるように努力している。	「すこやかカード」による正しい生活習慣の意識付けが定着してきた。毎日の朝食を欠かさないようにしたり、給食の残食も減ったりしていることから、早起きや食事の必要性も理解してきた。また、職員も一緒に元気アップ運動をすることで、児童生徒は刺激を受けて取り組めるようになった。	A	・規則正しい生活習慣のために、食事や健康の大切さを意識するようになってきた。さらに児童生徒が「食事」の大切さを自覚できるように、授業を通して自分たちで一食分のメニューを考えるような機会を作ったり、その良さを全校で共有したりしていく。	食育では、６年生の家庭科の授業で、栄養士と一緒に給食のメニューを考え、食事の役割や日常の食事の大切さを改めて考えることができた。また、「すこやかカード」で規則正しい生活習慣を意識していくことができた。	A
		元気アップ運動へ積極的に取り組む子ども	学校の元気アップ運動を通して、体づくりや健康づくりを意識できるように工夫している。	年度当初に、『元気アップは何の為にやる？』と全校で考えた。体力をつける、気持ちをスッキリ、集中力アップなど、気持ちの面も考えられている。また、リズム感を高めることで運動能力を向上させることができる、リズムトレーニングも取り入れた。	A	・元気アップがやらせている活動にならないように、「児童生徒が考える元気アップ運動」の機会を活かし、体づくりにはどのような運動が必要かを児童生徒が自ら考え意識が高まるようにしていく。	元気アップ運動は、走りたい、こんな筋トレがしたいなど意識して取り組む姿が増えてきた。自治会活動でも、優勝チームには「元気アップ運動を決める権利」にするなど、楽しむこともできた。やらされているのではなく、自ら取り組み、児童生徒が考える元気アップになってきている。ただ、意識の高まりには課題が見える。	B
	集団づくり	コミュニケーション力を高め、信頼し合える人間関係づくり	学級づくりや学校自治会活動、歌声づくりを通して信頼し合える人間関係が築かれている。	ステップ期の６、７年生が意欲的に活動を推進するなど、リーダーとしての成長を感じた。８、９年生が良い手本になっていることが大きい。そのような良い環境のなかで様々な活動を通して信頼関係が築かれている。対話の場面で意見などが出ないので対話が深まらず、言いっぱなしになっていることが課題である。	B	・対話の場面では意見を言ったり質問をしたりということがあまりないことやパターン化してしまっていることを受け、できるだけ時間を確保したり、対話の目的をよく考えさせたりして対話させたい。また、対話の深め方を職員が加わって手本を示せるようにしていく。	来年度リーダーを担う各ブロックの学年の児童生徒がリーダーの自覚をもち始めた。様々な活動を通して信頼関係を築けていると言える。しかし、対話の場面ではやりとりが続かず、深めるという点でまだ課題が残る。	B
		命の重さを知り、権利を守る	学校は一人ひとりを大切にし、いじめや差別のない、楽しく安心できる場所になっている。	なかよし班などの異年齢集団では、お互いの考えを大切にし思いやりをもって行動することができていたが、学級では人の気持ちを考えられずトラブルになる場面もあった。	B	・教師だけではなく、学級全体が仲間の声に耳を傾けられるようにし、一人ひとりに寄り添った対応を心掛けていく。	職員、多くの児童生徒が一人ひとりの個性を尊重しようとする意識が高く、「いじめアンケート」の結果からも多くの児童生徒が安心して学校生活を送れていると思われる。	A